



第7代校長
金岡千嘉男

第6代校長
松村文夫

第8代校長
村本健一郎

校長鼎談

石川高専の

教育研究機関としての役割

高島———— 本日は、校長として石川高専を導いてこられたおふたりの先生と現校長にお集まりいただきました。在任中のことなどをふまえて、本校の未来に向けてお話しいただきたいと思います。まず、松村先生から在任期間中で印象に残っていることをお話しいただけますか。

松村———— 私が石川高専に赴任するときには、前任の横山校長から「難問山積だよ」と言われました。実際に赴任してみると、最大の問題は専攻科がないことだということがわかりました。当時、福井高専にも富山高専にも専攻科があったのに、石川高専にはありませんでした。そこで、専攻科の設置にターゲットを絞り、取り組みを始めました。専攻科をつくるには専門学科の教員の半分以上は博士号を有することが必要と言われ、途中、学科を越えての人事異動もしました。文部省にはよく陳情に行きましたし、石川県には国の政策として取り組んでもらえるようお願いしました。金沢市でも、当時の山出市長が、福井と富山にあるのに石川にはないのは大変だろうということで、

理解を示してくれました。そうして赴任から2年後の平成12年4月に専攻科が設置されると、いろいろなことがうまく回り出し、そのほかの難問は消えていきました。現在は学位保持者も科研費の採択数も増えていますが、当時の先生方には辛かったかもしれません。ですから、学位の取得が近い人には、よく励ますようなこともしました。

高島———— それを引き継いだ金岡先生も、「教員はもっと研究しなさい」とおっしゃっていました。

金岡———— 科研費をきちんと申請しましょうということで、先生方が書かれた全ての申請書に赤ペンを入れることを始めました。

松村———— 科研費は出しても通らないかもしれませんが、出さない限り通ることはいない。一度通ると、それから後は楽に通りますよ、というようなことも申し上げました。

高島———— 松村先生のときには「申請しなかったら何にもならない。とにかく出しなさい」と、加えて金岡先生のときには「採択されなければ駄目だ」と言

035

未来を担う技術者を養成する高等教育機関として産声をあげて以来
歴代校長が据えてきたいくつもの礎石の上に石川高専は成り立っている。
とりわけ技術の高度化、情報化、国際化がめまぐるしい近年
羅針盤として進むべき道を示してきた3代の校長が
それぞれの取り組みへの思いやさらなる成長に向けての
期待や抱負を語り合った。

鼎談日時：平成26年7月18日（金）
鼎談場所：石川高専校長室
進行役：副校長 高島要

未来を語る

われました。村本先生も毎年、科研費の研究計画調書の説明会を開き、全調書に目を通して一人ひとりに助言されています。

高島———— 金岡先生は何が印象に残っていますか。

金岡———— 私が赴任したのは、ちょうど高専が独立行政法人に移行したときです。辞令は文部科学省で交付されましたが、機構（※独立行政法人国立高等専門学校機構）の内藤喜之理事長から手渡されました。独法化以降は機構を中心として物事が進むようになり、上意下達が強くなったように思います。高専の目的も、中堅技術者の育成ではないとされ、「高度化再編」という言葉が聞かれるようになりました。ほとんどの高専に専攻科ができ、JABEE（※日本技術者教育認定機構）による教育プログラムを受審することになっていきました。私が松村先生から課された宿題は、女子寮をつくるということでした。難しいことでしたが、ひょんなことからタイミングよく設置することになり、嬉しく思いました。

高島———— いまは機構でも自慢の寮になっています。金岡先生のときには、大きな組織替えをされましたね。

金岡———— それまでの教務・学生・寮務の3主事体制に図書情報主事と研究主事（専攻科長）を加えた5主事体制にしました。専攻科の比重が高くなってきて、それをどう運営するか、JABEE への対応や研究体制をどうするのか、といった問題に対応するためです。

高島———— 松村先生がつくられた土台に研究、地域連携、科研費などの取り組みを積み重ねていった時代ですね。そのおふたりの代の流れを村本先生が引き継がれています。

金岡———— 村本先生と初めて石川高専で打ち合わせをしたのは、平成23年3月11日、東北地方の太平洋沖に大地震が発生した日です。そのとき、津幡町もちょっと揺れたのですが、僕らは気づかなかった。同席していた総務課長は、国旗が揺れるのを見て感



石川高専の未来を語る

づいたそうですが、松田教務主事が飛び込んで来てはじめて大変なことになっている、と。

村本———— そうです。それが初めての打ち合わせの日で、強く印象に残っています。金岡先生とは、それ以前に金沢大学の21世紀COEプログラム（※平成14年度から文部科学省の事業として措置されたプログラム。世界最高水準の研究教育拠点形成のため、補助金による重点的支援

を行う）で一緒にさせていただいたご縁があり、松村先生は大学では工学部の同じ学科でしたし、学会も同じです。非常によく存じ上げていたおふたりの後に私が入ることになりました。おふたりには既にいろいろと種を蒔いていただいていたから、新しいことをしなく

ても、それを確実に育てていけばよいと、気楽な立場で赴任しました。

高島———— 村本先生はおふたりの積み重ねのうえに、着実に実行に移されて種を育てていらっしゃいます。例えば研究に関しても、そううるさくはおっしゃらないのですが、研究面での意識がいつの間にか浸透していったという気がします。今では科研費の採択

率でも全国の高専の中ではトップになりました。金岡先生の時もよく気になっていましたね。

金岡———— 私が来たころは、もちろん松村先生が種を蒔いてくださったのですが、いろんな面で富山・福井に遅れていましたね。それで、せめて富

山・福井には負けたくないと思いました。もっとも東海北陸地区というのは科研費の面で、岐阜や豊田が牽引して、全国平均から見ればずっとよかったので、お互いに刺激合っていた部分があったと思います。

村本———— 本当にほどよく種を蒔いていただいたおかげで、科研費の採択件数で全高専の中でトップになりましたよ。

松村———— 私の蒔いた種を金岡先生、村本先生がうまく育ててくださった。

高島———— 松村先生が専攻科の方向に舵を切ってくれなかったら、今日はなかったと思います。

松村———— そう言っていたけると嬉しいですね。

村本———— さらに金岡先生のときにGP（※文部科学省が教育改革のため大学等の「優れた取り組み：Good Practice」に対し財政的サポートなどを行うプログラム）をたくさん採られて、その成果を業績欄に書けるようになったことで私のときに件数が増えたのではないかと思います。

金岡———— いや、それは結果論でしょうけれども。GPについては、とにかく出して採ろうとしました。

村本———— 現代GPも教育GPも全部採ってしまいましたね。

金岡———— 1年目は出せず、2年目は出したけれど駄目でした。3年目は先生方が奮起されて、熊澤栄二先生が中心になって出してくれました。そのときに

ちょっといい雰囲気になったんですね。「郷土愛育成による環境改善教育システム構築」と題した現代 GP の取り組みでした。最初にヒアリングを受けたときの審査委員長の第一声が「環境問題に郷土愛が要りますか」というものだったので「こりゃ駄目だ」と思っていたら、後から聞いた裏話では、実は非常に的を射た表現だと好評で、ランクとしても高いところに入ったらしい。それが弾みになり、同じ年の学生支援 GP も採りました。平成 19 年 3 月に能登半島地震があり、被災地に最も近い技術系高等教育機関として、その復興対策を何とかしようと思いました。世間の関心は輪島市のほうに向けられていましたが、石川高専では穴水町に注目しました。テーマは「学外連携活動による人間力向上教育システム」でした。

高島———— 金岡先生は、うまく当時の時宜を得た言葉をお使いになりますね。

金岡———— それは重要だと思います。

高島 ————— 現代 GP の副題には「リテラシー」、後の教育 GP では「in situ」(※「本来の場所で」「適所に」などの意を表すラテン語

で、座学で学んだ法則や定理を実験などによって定着させることを目指した教育方法)という言葉が使われました。後に、そういう言葉は金岡先生が発案して取り入れていたと知りました。GP の影響もあり、現在の石川高専の科研費では相当に教育系のものが多くなっています。

金岡 ————— 教育は研究だという言い方を僕はしていましたのでね。

高島 ————— しきりにおっしゃっていましたね。「皆さんが教育法などで工夫していることを書けば、いくら

でも出せるじゃないか」と。

松村———— 私 の 時代には科研費の申請書も手書きの時代ではなかったかと思います。だから、申請すること自体がすごく大変でした。

村本———— そうですね。切り貼りしたり、穴を開けたり、マジックペンで色を塗ったり。

金岡———— 今は何件ほど採択されているのですか。

村本———— 30 件前後です。

金岡———— それは多いね。

村本 ————— 専門学科でいうとほぼ 50% です。ほぼ大学並みと言えます。

金岡———— 僕のときは 20 件程度でした。

高島———— 10 の後半から 20 件まででしたね。その壁を破ってくれました。

文武両道の教育

高島 ————— 3 人の先生方は、とりわけ課外活動にも力を入れていただいた、と申しますか、先生方ご自身も楽しんでいらっしゃっ

たようにお見受けしました。

松村———— 私は、スポーツは何でも好きです。高専大会の会場は広い範囲に分散しているけれども、あちこち応援に行きました。なるべく学生が競技している場に行こうと思いましたね。

高島———— 高専体育大会というのは、高専ならではの持ち味がありますね。

松村———— 地区大会を勝ち抜くと全国大会に行けるので、全国という目標を持ってやれます。

高島———— 僕も実感しましたが、北陸で勝ったらとにかく九州や北海道に旅行ができる、と。学生たちにはそれも楽しみでしたね。

松村———— 僕は野球で釧路、九州にはバレーボールの応援に行きました。

高島———— 金岡先生も大会が近づいてくると各クラブの練習場に突然お越しになるものですから、部員たちもピリッとするようなことでした。

金岡 ————— 僕は、自分で運動した経験がほとんどなかったので、できるだけいろいろな場所に応援に行くようにしました。

高島 ————— 今は、村本先生も大会前には各クラブの練習場、大会のときには各会場を回っておられます。

金岡———— たぶん、松村先生のときは地区大会でずっと総合優勝しておられたのですが、僕が校長になってから駄目になった。おそらく、「校長のせいだ」と言われたはずですよ(笑)。初年度は 3 位でした。それが翌年に 2 位となって、3 年目に総合優勝しました。

高島———— そこからですか。

その総合優勝がスタートとなって今年(※平成 26 年度)で 9 連覇です(※平成 27 年度に 10 連覇達成)。

金岡———— 入試志願者数もそうでした。松村先生のときはよかったけれど僕の年にガクンと落ちて、「校長が替わるとね・・・」と言われました。

高島———— けれど、赴任されて 2 年後には高専大会も活況を呈してきました。運動面で活況を呈してくると、学校全体もよくなってきます。

金岡———— 大学にいるときにも運動会というのが

あったのですが、運動会で優勝する学科は研究面もいい。勉強するだけじゃ駄目で、運動もしなくちゃいけない、つまり遊ぶ心の余裕が大切。石川高専へ来ててもそういう考えがあって、自分では運動の技術指導はできないから、応援に力を入れました。

高島 ————— トップの先生方のそういうお考えが自然と浸透していった、村本先生は、今では「文武両道」をキャッチフレーズにかかげています。

外から見た高専

高島 ————— みなさんは大学から石川高専に赴任されていますが、大学と高専で違う点はありましたか。

松村 ————— 私は高専のことはよく知っています。高専の生き字引です。思い出を遡ると、石川高専の竣工式に至ります。竣工式に出席し、「酒が出ないのは寂しいね」と、隣の先生とお話していました。

高島 ————— 松村先生は竣工式に出席しておられたのですか。

松村———— そうです。それは、

私の講座の助教授であった高木金生先生が石川高専に電気工学科の主任として来られたからです。竣工式は昭和 40 年。私は金沢大学工学部の電気工学科を 33 年に卒業しています。非常勤講師として石川高専に来ていたこともあります。最初の学生から教えていました。吉元武先生が在外研究員に行ったときのピンチヒッターとしても来ていました。工学部の私の研究室の第 1 回の卒業生が吉元君です。校長の時には、吉元先生には教務主事としても、いろいろやってもらいまし

た。

高島————— そういう意味では、松村先生は石川高専ができたときからの生き証人ですね。石川高専にはもうそんな方はおりません。

金岡————— 私が校長をしてから2～3年で本校創設期の人はいなくなりました。

松村————— 私が来たときには、4割くらいの先生は、金沢大学工学部から来た先生だからよく知っていました。

高島————— 校長は、一般教育科からの三輪武雄先生を除くと、初代からしばらく土木専門の方が続きました。金岡先生は、着任されるときに「こんな田舎に」と思ったのではないのでしょうか。

金岡————— そうでもないです。高専の横の国道はよく通っていましたが、まさか竹藪の後ろに学校があるとは知りませんでした。

高島————— 金岡先生のとときには守衛室の建物の整備もしました。

金岡————— 守衛さんがいなくて廃墟のようになっていましたからね。最初、石川高専を見たときに、学校の向きがおかしいと思ったんですよ。津幡の町のほうに正面が向いているべきではないか、と。それで、入口に何かをつくり、津幡町とのつながりが出来るようにしたいと思いました。

松村————— 初代校長は土木工学が専門の先生でしたから、かなり先生のお考えが入っていたと思いますよ。竣工挨拶のときに、いろいろと土木の用語が出てきたのを覚えています。

高島————— 地形的な制約もありました。尾根の上



第8代校長
村本 健一郎
在任期間
平成23年4月1日～現在

に学校をつくり、谷は埋めざるを得なかった。

金岡————— 土砂崩れはありませんか。

高島————— あります。何回か修理していますが、安定はしていません。金岡先生も入口がおかしいと思われたとのことですが、村本先生は竹藪が密集し過ぎて校舎が見えないじゃないか、と。それで、竹藪を一本残らず伐採されました。

金岡————— 僕は、竹林にしたかったんです。

村本————— そうだったのですか。

高島————— それぞれに徹底ぶりが違いますね。金岡先生は、嵯峨野の竹林のようにきれいにしたかったのでしょう（笑）。

松村————— 竹藪があったときは、タケノコも採れましたが、密集し過ぎているといいタケノコは採れませんね。

高島————— バブルの頃でしたか、JRの線路の上に橋を架ければいいじゃないかという話もありましたね。

金岡————— それは豪勢ですね。

高島————— 高専の学生の気質、先生の違いなどはどうですか。

金岡————— 高専出身の学生も教員も、大学在任中に指導しましたが、概して自分が高専卒だと言いたがらないように見えます。私は高専のことを「中学から入る大学だ」と言おうと提案しましたが、その案は通りませんでした。高専は若いときから専門教育をするスタイルですね。一方の大学は、自分で考えなさいというのが建前です。しかし、実際はほったらかしになっているところがあります。高専は専門を教えるということをずっと守っています。高専の卒業生はいい教育を受けているのです。ですか

ら、高専から大学に編入したら、「高専でこういう教育を受けてきた」ともって自信をもって言えばよいのに、なぜか言いたがらないような感じていました。

高島————— 村本先生はお若いときに高専の教員をしておられました。教員の立場から高専をよくご存知ですね。そういう点から、大学の先生と高専の先生の違いについてどのような感触をお持ちですか。

村本————— 高専は、先生方が忙しいですね。大学は授業をやって研究をしていればよい。私は大学では研究一筋でした。高専の先生方は研究以外の地域貢献、部活動、寮の宿直、生活指導など本当に忙しい。一生懸命に働いている。それで、金岡先生もおっしゃっていましたが、先生方に自信を持っていたらこう、と。石川高専の教員や学生でいることに誇りを持てるように、あれこれ工夫をしているつもりです。

高島————— 我々はつい、校長は我々が忙しいということを知っておられないんじゃないかと思ってしまうますが、皆が忙しいということを十分承知した上で、なおかつ心を鬼にして、発破をかけているということですね。

国際化に向けて

高島————— 先生方の時代から国際化ということが言われ、国際社会に対応できる技術者を育てるために、海外との交流を視野に入れた活動に取り組んだ



進行 副校長
高島 要

ことも大きな変化であったかと思います。石川高専では平成26年度から専門の委員会を立ち上げ、国際連携を進めていますが、海外の学校との協定の話が出るようになったのは松村先生のころからですね。

松村————— 私のころは専攻科をつくることが第一で、文部省に陳情に行くことが非常に多かったです。当時の事務部長の磯田義賢さんと4年ぐらい一緒にしましたが、いろいろなところによく行きました。平成11年8月でしたか、とにかく、石川高専に注目してほしいと思って、インドネシアにも行きました。スラバヤ工科大学のそばにある、現地の高専相当の学校への援助をするためです。ちょうど専攻科がよい方向に行っていた時期でして、現地のホテルで、専攻科の設置が決まったと、石川高専からファックスが届きました。それで翌年4月に設置が決まりました。

高島————— 金岡先生の時代には、平成19年に中国杭州職業技術学院と交流協定、21年には中国大連職業技術学院と学術協定を締結しました。中国との協定のルートはどうだったのですか。

金岡————— 先生方から協定の話が持ち上がるのがもっとも好ましいのですが、大学時代の教え子である中国人の関係で杭州職業技術学院との協定を結びました。大連のほうは、石川県日本中国友好協会会長の古賀克己さんの関係です。古賀さんが直接来られてその話になりました。4学年の研修旅行を外国に行ってやろうということで、行き先として最初に杭州の学校を選びました。研修旅行として2回ぐらい行ったと思います。各学科で順番に行ってもらうことにしましたが、いろいろ抵抗もありました。

高島———— 村本先生が来られてから、古賀先生と、もう一度大連の話になりました。

村本———— そうですね。平成 24 年に大連工業大学と学術協定を締結しました。その年早速、研修旅行で学生の大連大学訪問が実現しました。

高島———— 村本先生は非常に計画的で、平成 27 年度からは 5 学科とも海外に研修旅行に行くことになっています。松村先生の頃はまだグローバルという言葉は浸透していませんでしたが、外国に目を向けるのは重要と考えていらっしゃいました。

新たな 50 年へ

高島———— 最後に、これからの石川高専に期待することをおうかがいしたいと思います。国の方針で学校制度はよく変更されますが、高専は 50 年続きました。高専制度はよい制度だと考えてよろしいでしょうか。

松村———— ええ。私はたまたま東海北陸地区の理事校に当たりまして、全国の校長会に行くと議長をしたりしました。忙しかったですが、よい思い出でした。そのときに、教員の教育業績評価というのが大事な問

題になっていました。石川高専からまずやらなければと思い、他の高専よりも 1 年早く石川高専で教育業績評価を実施したのです。

高島———— あの制度は、ほとんど同じ形で現在も続いています。

松村———— 金寺登先生が文部科学大臣賞(※平成 24 年度国立高等専門学校教員顕彰・教育業績賞における文部科学大臣賞)を受賞しましたね。委員長として案をつくり、8 割方は実施してもらえました。

高島———— 金岡先生はこれからの石川高専に何を期待しますか。

金岡———— 僕は、専攻科の長期インターンシップはかなり先駆的だったと思っています。それから、in situ 教育は、大学とは違う実践的な教育の方法なので、高専として一生懸命やられたらいいと思います。専攻科について言うと、本科と合わせて 7 年で 1 つの単位とした教育というのは重要です。ただ、専攻課程という名前自体は法律としての裏打ちがなく、不安定なので、それが気になります。それから、校長という名前も実は気になっています。校長と聞けば、小学校、中学校、高等学校の校長を連想します。高等教育の匂いがしない。名前だけなのだけれども、ちょっと違和感があります。科研費の採択件数は石川県的高等教育機関が 20 校あるうちの 5 番目に高い。研究者の

人数が少なくてもすごい力を持っているのに、それが評価されていないのはとても残念です。存在感を示すには、「校長」より「学長」のほうがいい。頑張っしてほしいというよりは、社会に対してアピールしてほしい。石川高専の出身者は、学生も就職したら重要な仕事を任せられ、大学出身者よりはよい仕事をする能力があるのに、ちょっと評価が低いような気がします。高専卒業者の評価を如何に高めていくかが次の課題でしょうか。

高島———— 村本先生はこれから 50 周年を迎えるにあたって、いかがですか。

村本———— 僕の場合は、先代、先々代のつくってくれたものを発展させていくことが大事だと思っています。技術振興交流会は、金岡先生が大きくしてくれて、いま大変に助かっています。

高島———— 澁谷進さんに技術振興交流会の会長になってもらうよう要請したのは金岡先生ですね。

金岡———— やはり技術振興交流会の会長は、経済界に大きな影響力を持った方がよいと思って、澁谷さんをお願いしました。

高島———— その頃から特に活動が広がり、金岡先生のときに会員企業は 100 社を超えたと言っていました。いまでは 170 社となりました。

村本———— 石川県にこんなにたくさんのすばらし

い企業があるのかと驚きました。

高島———— 現在も会員企業は増えつつあります。高専生が会員企業に就職するなど、地域とよい雰囲気です。

金岡———— それから、トライアル研究センターのコーディネーターですね。共同研究や産学連携の補助金申請、採用の件も含めて、企業と石川高専のパイプ役として働いていただいています。コーディネーターの導入のときには、割澤泰先生がよく頑張ってくれました。

村本———— 様々なことに対して早く手を打ってくれる先見の明があって、これから先に必要なことを手がけてくれました。学校全体で同じ方向に向かって発展させていこうという気運をつくってもらって、大変に助かっています。私はその路線に乗っていきます。高専のめざすところは何といっても技術者の人材育成です。大学などがいろいろと変わっていく中で、教育を第一に大切なことを守っているのが高専のいいところであり、守るべきところは守りながら、おふたりの蒔いた種をしっかりと育てていこうと思います。

高島———— 本日はどうもありがとうございました。

石川高専の未来を語る

